

慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけし

出だしはバビロン捕囚からの帰還への祈りであるという印象を与えるが、さらに一般化して、困難な旅からエルサレムに帰ってくることをイメージしても良いであろう。帰る場所、故郷、礼拝の場があることは幸いである。5 節は主なる神ご自身が捕囚あるいは旅先から帰還して下さいと祈願している。本編は「帰る」(šub) ということが様々な場面で用いられている。(2 節、4 節、5 節、7 節再び、9 節戻る、)9-14 節は教会ではアドヴェントに良く読まれてきた。また、11 節~14 節はヘブライ語聖書の鍵語が美しい形で登場している。「慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけし/まことは地から萌えいで/正義は天から注がれます。」そして、「主は必ず良いものをお与えになり/わたしたちの地は実りをもたらします。」と確信し、信仰の単なる精神化ではなく、即物的祝福への信頼を告白している。

1. ヤコブの囚われ人を連れ帰ってくださいました (2 節)

主なる神 (ヤハウェ) は、「ヤコブの囚われ人を連れ帰ってくださいました」と言い、それはその地パレスチナあるいはエルサレムが「ご自分の地」であり、これを神が望まれたから (これを好ましいと思われているから) だと言う。現在のイスラエル建国とパレスチナ問題の重大な緊張と葛藤はあるが…。

2. 祝福の言葉 (3 節~4 節)

捕囚あるいは旅からの帰還は、「罪の赦し」、「咎を覆うこと」、「怒りを取り去ること」、「憤りを静めること」(3 節、4 節、「救い」、「苦悩(怒り)の静め」(5 節)、「再び命を得させること」(生き返らせる)、「喜び祝うこと」(7 節 あなたにあって喜ぶ)、「慈しみを示すこと」、「救うこと」(8 節) と言葉を重ねて賛美され、また、祈願されている。「覆うこと」(創世記 3:21、I ペトロ 4:8、ヤコブ 5:20) とは何かを暴露せずに、見ないこと!

しかし、この救いは 5 節~8 節においてはいまだ達成されていない希求となって噴出し

3. 平和(šalōwm)の宣言 (9 節~10 節)

突然主なる神が語り出す。「平和あれ、救いあれ!」と。捕囚あるいは旅からの帰還は、神の和解の業であり、「平和宣言」(9 節) である。この宣言は、民が主の慈しみから逸れて、愚かな振る舞いに戻らず、主を畏れて生きるように期待されてなされたものであ

る。信じる者たちが、「救いと神の栄光の中に」歩むためである。

4. 平和と正義のドッキング (11 節～12 節)

「慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけし/まことは地から萌えいで/正義は天から注がれます。平和は常に正義と結び合わされねばならない。人は「平和」のためにといい訳をして戦いを起こし、単なる正義の主張は「平和」を脅かすからである。「日本カトリック正平協」の名がこれらの結びつきの大切さを示している。

また、この「平和」と「正義」のドッキングは「まこと」と「正義」の切り離せない関係として言い表すことができる。その関係を、前者は「出会い」と「口づけ」(ドライキス?!) という人間社会の習慣を例にとり、後者は、地と天の結びつきとして美しく描いている。この「平和」と「義」と「慈しみ」と「まこと」の神の属性の一体化はイエス・キリストの人格と働きによって成就され、なおかつ、終末論的期待の中にあるのである。

5. 主は必ず良いものをお与えになり、(13 節)

ヨブが「主は与え、主は奪う」(1:21) と言い、「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか」(2:10) と言う。確かに私たちは時に、災難・苦難に出会う。しかし、それらは究極的には、「主は必ず良いものをお与えになり、わたしたちの地は実りをもたらします」ということの中で起こることなのである。

6. 正義が行進の先頭に立って (14 節)

捕囚あるいは困難な旅路からの帰還の行進には、正義が先陣をきり、「主の進まれる道を備えます」と言い、詩編の最初のモチーフに戻る。「ドラゴンクエスト」や「ファイナルファンタジー」のゲームソフトでは、冒険の旅を通して経験知を増やし成長していくのであるが、そこには先頭を往く主人公と仲間たちの伴いがあるのである。イザヤ 40:3-5

「呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備えよ、わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。主の栄光がこうして現れるのを肉なる者は共に見る。」

最後の行では BH の脚注によると、たぶん、「ヴェヤーセイム」(「する」「造るであろう」) が「ヴェヤーシャー」あるいは「ヴェシャローム」に置き換えられている。すると行進の先頭には正義が進み、しんがりあるいは陪臣として「救い」あるいは「平和」が行くということで、前節と繋がることになる。